

『東海道名所図会』

寛政九（一七九七）年刊 六卷

あきさと りとう

秋里 籬島 / 著

竹原 春泉斎ほか / 画

江戸後期の絵入り名所案内記。京都から江戸までの東海道の名所の由来や逸話を絵を交えながら説明しています。

磐田市に関連した項目は、巻二に掲載さ

てんりゅうがわ

いけだのしゅうく

ゆやじ

れている「天竜川」、「池田宿」、「熊野待

じゅうごせき

なかいずみ

はちまんぐう

いま

うら

従古跡」、「中泉」、「八幡宮」、「今の浦」、

みつけ

みかのはし

きんさつのつる

「見附」、「三香野橋」、「金札鶴」です。

わかりやすく活字化された書籍に、当館所蔵の『新訂東海道名所図会（上・中・下）』（ペリかん社・平成一三年）があります。

天竜川

川幅十町ばかり。一の瀬、二の瀬の二流となる。船渡しなり。水源は信州諏訪の湖より落つる。末は海に注ぐ。そのところを天竜灘という。むかし、このほとりに天竜寺という浄刹あり。これによって名とす。今も天竜村あり。

『十六夜日記』

「天竜のわたりというを舟にのるに、西行がむかしも思い出でられて、いと心ぼそし。組み合せたる舟ただ一つにて、おおくの人に往来に、さしかえるひまもなし。

水の泡のうき世にわたる程を見よはや瀬の小舟さほもやすめず 阿仏

『光行紀行』

「天竜と名づけたる渡りあり。川深く、流れおそろしきと見ゆる。秋の水みなぎり来りて、舟の去ること速かなれば、往還の旅人、たやすく向いの岸に着きがたし。この水の水屑となるたぐい多かりと聞くこそ、かの巫峡の水の流れ思ひよせられて、いと危うき心地すれ。しかはあれども、おもうにも、譬うべき方なきは、世に経る道のけわしきならいなり。

この川のはやきながれも世の中の人のごころのたぐひとぞ見る 光行

されば天竜川のながれ常に浩々として、驚波竜門に下るのいきおいあり。晋の重耳は璧を投じ、榎を浮かべば星斗に近き天呉たり。

むかし建武の乱に、新田左中将義貞、東国の軍に利なくして、帰り登られし

ことを、『太平記』にしろして、

「天竜川の東の宿に着きたまいにけり。にわかにな家を壊ちて、浮橋をぞ渡されける。(中略)諸卒をみな渡し果てて後、船田入道と大将義貞朝臣と二人、橋を渡りたまいけるに、いかなる野心の者かしたりけん、浮橋を一間、張綱を切つて捨てたりける。舍人馬を牽いて渡りけるが、馬とともに倒も落ち入つて浮きぬ沈みぬ、流れけるを粟生左衛門、鎧着ながら川中に飛び入り、二町ばかり遊びつきて、馬と舍人とを左右の手にさし上げ、肩を越しける水の底を静かに歩みて、向いの岸へぞ着きたりける。

馬の落ち入りけるととき、橋二間ばかり落ちて、渡るべきようも無かりけるに、船田入道と大将と二人手を取り組み、ゆらりと飛び渡りたまふ。その跡に候いける兵二十余人、飛びかねてしばし徘徊しけるを、伊賀国の住人名張八郎とて、名誉の大力のありけるが、「いで渡して取らせん」とて、鎧武者の上巻を取つて宙に引つさげ、二十人までこそ投げ越しけれ。今二人残つてありけるを、左右の脇に軽々とさし挟んで、一丈余り落ちたる橋をゆらりと飛んで、向いの橋桁を踏みけるに、踏みどころ少しも動かず。誠に軽げに見えければ、諸軍勢はるかにこれを見て、「あないかめし、いずれも凡夫の態に非ず。大将といい、手の者といい、いずれ捨つべしとも覚えねども、時の運に引かれて、この軍に打ち負けたまいぬるこそうたてさよ」と、云わぬ人こそなかりけれ。」

と記し、また『梅松論』に、「義貞、天竜に橋かけさせ、打ち渡りて後、すべ

て敵に向うとき、小勢にて川を後に当てて戦つには、退くまじき六韜の謀にて、橋を切るには武略の手段なり、敵とても懸けて渡すべき橋を切り落として、敵に急に襲われしと周章ふためきたると言われんこと、口惜しかるべし、よく橋を警護せよとて渡られし」ことなど見えたり。

これらを考うるに、義貞は武略の人にして、関羽が賢豪に張飛が雄力を兼ねたり。後醍醐帝の聖運やつたなかりけん。ついには新田・楠の豪傑、魁じて亡びぬることは、みなこれ天のなせるところなりと思われける。

池田宿

いにしえは天竜川の西岸にあり。古人の紀行、多くは池田の宿に泊まりて、天竜川を渡ると書きたり。校正、川瀬変じて東岸となる。

夫木抄

そのかみの里は河瀬となりにけりここに池田のおなじ名なれど 参議通資

『富士紀行』

ゆたかなる池田の里の民までもすみよき御代にあふやうれしき 堯孝法印

『丙辰紀行』

「美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越、いずれも長者遊君ありて、むかしは往還の武士、軽薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金に笑を買うところなれば、かの江口の津にも、争がおとり侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も、この池田

の宿のむすめにて侍ること、世にかくれなし。今はこの宿、天竜の河の東の端に形ばかり残りて、わずかなる小民ども、わたりを守りて居侍りける。

大天竜、小天竜とて、二つの河ありけるが、新田左中将の、尊氏と戦い負けて登られけるとき、浮橋の桁のなかりけるを、飛び越えられけるも、こここのとなり。江都が軽捷のありけるにや。浜松のそばなる細流を、小天竜のことなりと今ぞいうめる。

羅山

池田の駅長もと娼家

処子の嬋娟天下に誇る

腰は楚王宮裏の柳に似て

面は巫女廟前の花の如し

古今尽きず洪河の水

淵瀬相移る兩岸の砂

治乱興亡我が事に非ず

征鞍暫く憩うてしばらく茶を嘗む

「重衡海道下」にいわく、

「浜名の橋を渡りたまえば、松の梢に風さえて、入り江に噪ぐ波の音、さらでも旅は物憂に、心を尽くす夕まぐれ、池田の宿にも着きたまいぬ。

かの宿の長者熊野が女侍従が許に、その夜は三位宿せられけり。侍従、三位

の中將殿を見奉りて、「日来は伝にだに思し召し寄りたまわぬ人の、今日かかるところへ入らせたまうことの不思議さよ」とて、一首の歌を奉る。

旅の空はにふの小屋のいぶせさに故郷いかに恋しかるらん

熊野侍従

かへし

ふるさとは恋しくもなし旅の空都も終のすみかならねば 三位中將

ややありて、中將、梶原を召して、「さてもただ今の歌のぬしはいかなる者ぞ。

艶しくも仕りたるものかな」と言えば、景時、畏まって申しけるは、「君はいまだ知ろし召され候わずや。あれこそ八島の大將殿の、いまだ当国の守にて渡らせたまいしとき、召されまいらせて御最愛候いしに、老母故郷にて痛わりあれば、都より御暇を申し上げしかどもたまわらざりければ、頃は弥生の初めにやありけん。

いかにせん都の春もをしけれどなれし吾妻の花やちるらん

という名歌仕り、暇をたまわりてまかりくだり候いし、海道一の美人」とぞ申しける。都を出てて日数経ぬれば、弥生も半ば過ぎて、春も既に暮れなんとす。

遠山の花は、残の雪かと見えて、浦浦島島霞渡り、越方行末のことども思いつづけたまうにも、「こはいかなる宿業の方見さよ」と宣つて、つきせぬものは涙なり」。

熊野侍従古跡

池田の宿、撰取山行興寺という、時宗の梵刹、池田長者熊野が古跡なり。本尊に行基の作の阿弥陀を安ず。

山崎暗斎

池田の宿はふる天竜の上

湯谷の墳は残る林藪の中

憫むべき宗盛声色に溺れ

汚名濁水に相従う

熊野墳 本堂の側にあり。紫石の塔婆、「建久九年五月三日没す」と鐫す。

同じく老母墳 同所にあり。銀だみ石の塔婆、「建久元年四月三日没す」と鐫す。

侍女葬墳 近隣前野村にあり。池田宿より南一里ばかりなり。

されば池田の長といえるは、今の本陣宿のごとし。仁安の頃、この長者、子なきを歎きて熊野権現へ詣して祈りければ、一女子を儲く。その名を熊野と名づく。三五の歳にもなりしかば、その風俗窈窕として、雲鬢花顔、一笑千金の倂も、今はむかしとなりて、鬼火さよしぐれに青く、枯骸朝あらしに晒れて、秋草墓畔に茂る。一歳遊行の二世、他阿上人真教、国めぐりのときここに泊れり。熊野が菩提を弔い藤沢流の寺とし、これを池田道場よぶものならじ。この寺の什宝に蜷川氏の書かれし熊野の謡の絵伝あり。文字は近衛流、絵は土佐風

にして古雅なり。

中泉

池田のひがし一里余にあり。むかしの駅なり。このところ遠州の国府という。むかしは池田の宿より鷺坂にかかり、北へ行く。今は中泉にかかりて南に行くなり。

八幡宮

境松村にあり。石清水を勧請して、社頭壮麗、境内広し。この地の生土神とす。この辺りに国分寺、閻魔堂、薬師堂あり。

今の浦

見附台の南をいう。今はあせて沼野となる。八幡宮の後に池あり。これ今の浦の古跡なり。

『光行紀行』

「今の浦に着きぬ。ここに宿かりて、一日二日泊りたるほどに、海士の小船に棹さしつつ、浦の有さま見めぐれば、塩海のあいだより、洲崎遠く隔たりて、南には極浦の波袖を潤し、北には長松の風心をいたましむ。名残り多かり橋本の宿にぞ似たる。昨日の目うつりなからずば、これもこことまららずしもあら

ざらましなどは覚えて、」

波の音も松のあらしも今の浦にきのふの里の名残をぞ聞く

光行

見附（遠江）

袋井まで一里半。富士山あらわに見ゆるゆえ見附台という。

『十六夜日記』

「今宵はとおつ淡海見附の国府というところにとどまる。里あれて物おそろし。かたわらに水の井あり。」

『名寄』

誰か来て見つけの里と聞くからにいとど旅寝は空おそろしき

阿仏

『身延紀行』

今は身のたれにかくさんこともなし見つけの里の名をもちとはじ 元政法師

そなたのかたに雲おおいて、ふじの山見へず

よしさらば中々くもれことの葉の見てもおよばじふじの高根は 同

『紀行』

山崎闇斎

当面見来す見附台

台辺馬を繋ぎ立ちて裴徊す

太平象あり松山の色

忠勝勇名ともに壮なるかな

三香野橋

三香野村の東にあり。『歌枕名寄』に駿河と書きしは謬りならん。

『名寄』

うかりけるみかのの橋のくちもせで思はむ道に世をわたるかな 宗尊親王

金札鶴

三香野橋の東爪、西島より十町ばかり左の方に、岩井村というあり。里諺にいわく、むかし右大将頼朝卿、鶴の齡をためさんとて、鶴の脛に金札を付けて、年号をしるし放ちたまうとかや。今の世にも、その鶴このほとりに舞い遊ぶといふ。